

作成日	2024年6月27日
学科名	英語文化コミュニケーション学科

教育・学習

1. 現状分析

自己評価：S (A) B・C

<p><b>評価項目①</b>  達成すべき学習成果を明確にし、教育・学習の基本的なあり方を示していること。  &lt;評価の視点&gt;  ・学位授与方針において、学生が修得すべき知識、技能、態度等の学習成果を明らかにしているか。  また、教育課程の編成・実施方針において、学習成果を達成するために必要な教育課程及び教育・学習の方法を明確にしているか。  ・上記の学習成果は授与する学位にふさわしいか。</p>
<p><b>参照資料</b>  ・学位授与の方針  ・教育課程編成・実施の方針  ・その他参照した資料（ )</p>

【現状分析】

「英語文化コミュニケーション学科 学位授与の方針」において、学生が修得すべき能力として「十分な実用的英語運用ができる」、また「対話や議論を通して、他者との相互理解や協調に努めることができる」、「主体的に課題を発見し解決できる」と明示している。それらはさらに「英語文化コミュニケーション学科 教育課程編成・実施の方針」において、学位授与の方針に示す能力を修得するための教育課程及び教育・学習の方法として、1 回生では英語スキル科目で実践的な英語運用能力を高め、さらに 2 回生では、引き続き英語スキル科目を学びつつ英語圏への半年留学等の選択科目を通じて、英語能力を飛躍的に伸ばしながら異文化理解を深めると示されている。そして 3 回生では英語コミュニケーション能力とキャリア形成能力を滋養しながら、多様で自由な専門研究に取り組み、主体的に調査して自ら考える力を養い、さらに 4 回生では 1 つの分野に絞って、一段と専門性の高い知識・技能を身につけるとともに、指導教員の個別指導のもと 4 年間の学修を総合して卒業研究を完成させ、スタンダードな英語使用による高い表現能力と、生涯にわたって学び続ける能力の確立を目指す、と明示されている。これらにより学生が習得すべき知識、技能、態度等の学習成果を明らかにし、それを達成するために必要な教育課程及び教育・学習の方法を明確に示していると考えられる。

自己評価：S (A) B・C

<p><b>評価項目②</b>  学習成果の達成につながるよう学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していること。  &lt;評価の視点&gt;  ・学習成果の達成につながるよう、教育課程の編成・実施方針に沿って授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。  ※ 具体的な例  ・授与する学位と整合し専門分野の学問体系等にも適った授業科目の開講。  ・各授業科目の位置づけ（主要授業科目の類別等）と到達目標の明確化。  ・学習の順次性に配慮した授業科目の年次・学期配当及び学びの過程の可視化。</p>
---

#### 参照資料

- ・ R5 設定の主要授業科目表
- ・ R5 設定のカリキュラムマップ、ツリー
- ・ 単位修得要領
- ・ シラバス
- ・ 学修行動調査の学修時間に関する設問（大学）
- ・ その他参照した資料（ ）

#### 【現状分析】

教育課程編成・実施の方針に基づき、英文学、英語学、異文化理解、英語教育等を主たる柱として、主体的に調査し考える力を身につけ、英語による高い表現能力を獲得できるよう、専門科目と英語スキル系科目から成る体系的な教育課程を編成・実施している。学科専門教育としては、1 回生から順次積み上げる形で、大学での学びと研究に関する基礎的な内容の導入と、少人数でプレゼンテーションや質疑応答・ディスカッションを行い、レジュメやレポート作成等のアカデミックスキルを身につける演習科目 Basic Research Seminar を配置している。2 回生ではさらに高度な知識や研究能力を身につけるための演習科目である Research Seminar、3 回生には卒業論文を執筆するための準備としての演習科目 Advanced Research Seminar、4 回生ではそれまでの教育・学習の総括として、卒業論文・卒業研究を完成させるためのゼミ Graduation Research Seminar を配置している。学位授与の方針と、配置している授業科目との関連については、カリキュラムマップにおいて示しており、カリキュラム全体の体系性については、カリキュラム・ツリーを作成し、新入生を対象としたオリエンテーションにおいて説明している。

自己評価：S (A) B・C

#### 評価項目③

課程修了時に求められる学習成果の達成のために適切な授業形態、方法をとっていること。また、学生が学習を意欲的かつ効果的に進めるための指導や支援を十分に行っていること。

##### <評価の視点>

- ・ 授業形態、授業方法が学部・研究科の教育研究上の目的や課程修了時に求める学習成果及び教育課程の編成・実施方針に応じたものであり、期待された効果が得られているか。
- ・ I C T を利用した遠隔授業を提供する場合、自らの方針に沿って、適した授業科目に用いられているか。また、効果的な授業となるような工夫を講じ、期待された効果が得られているか。
- ・ 授業の目的が効果的に達成できるよう、学生の多様性を踏まえた対応や学生に対する適切な指導等を行い、それによって学生が意欲的かつ効果的に学習できているか。

##### ※ 具体的な例

- ・ 学習状況に応じたクラス分けなど、学生の多様性への対応。
- ・ 単位の実質化（単位制度の趣旨に沿った学習内容、学習時間の確保）を図る措置。
- ・ シラバスの作成と活用（学生が授業の内容や目的を理解し、効果的に学習を進めるために十分な内容であるか。）。
- ・ 授業の履修に関する指導、学習の進捗等の状況や学生の学習の理解度・達成度の確認、授業外学習に資するフィードバック等などの措置。

#### 参照資料

- ・ シラバス
- ・ ALCS 学修行動比較調査（1・3 回生）
- ・ 授業アンケート

- ・学修行動調査（大学）
- ・卒業時アンケート（大学）
- ・ジェネリックスキル測定テスト
- ・その他参照した資料（ ）

#### 【現状分析】

英語文化コミュニケーション学科では、1、2回生で基礎的な英語力の定着と発展、および専門分野への導入の学習に重点を置き、同時に TOEFL や TOEIC の受験を促し、留学説明会を開催するなどして、海外留学に対する関心を高めている。3、4回生においてはゼミでの卒論研究を通して、英語の論文や資料などを収集・分析し議論することで、文学・文化、英語学、英語教育、異文化理解のより深い専門知識の習得と理解に重点を置いている。

この成果として、2023年度卒業時アンケートの「国際感覚が身につく授業の多さ」、「語学力が向上する授業・制度」の両項目では、「大変満足している」と「ある程度満足している」の合計がともに61%と、全学科の平均（それぞれ35.2%と42%）を大きく上回っている。また学科独自の留学制度が用意されているので、「留学の支援・制度」に対する満足度も37.3%と全学科の平均である22.4%よりもかなり高い。その結果として修得度の「外国語を使う能力」については、「よく当てはまる」と「ある程度当てはまる」の合計が78.2%と、12学科中で飛びぬけて高いものとなっている。こうした評価はグローバルな視点に立ったコミュニケーションを大切に、語学教育を重視する学科の取り組みの成果を反映したものであると思われる。また「地域の人や実際の社会と連携する授業やインターンシップの多さ」でも45%と他学科と比較しても高い数値であり、大学での学びと社会との接続がカリキュラム編成においてある程度学生にも意識されていることが示されている。さらに「自分で考える力が身につく授業の多さ」や「教授、先生の授業への取り組みに対する熱心さ」などにおいても85.6%、78%と全学科の平均（84.4%、76.5%）を上回っており、主体的に調査して自ら考える力を養うという英語文化コミュニケーション学科の教育課程編成・実施の方針に基づき、各教員が意欲的に授業に取り組んでいることが示されている。

自己評価：S (A) B・C

#### 評価項目④

成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っていること。

##### <評価の視点>

- ・成績評価及び単位認定を客観的かつ厳格で、公正、公平に実施しているか。
- ・成績評価及び単位認定にかかる基準・手続（学生からの不服申立への対応含む）を学生に明示しているか。
- ・既修得単位や実践的な能力を修得している者に対する単位の認定等を適切に行っているか。
- ・学位授与における実施手続及び体制が明確であるか。
- ・学位授与方針に則して、適切に学位を授与しているか。

#### 参照資料

- ・シラバス
- ・授業アンケート
- ・各科目の成績分布
- ・学修行動調査の成績評価に関する設問（大学）
- ・ALCS学修行動比較調査（1・3回生）

- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料 ( )

【現状分析】

シラバスが「授業進行の理解」において参考になったか、また「履修登録」の際に参考になったかという設問では、2023 年度後期の授業アンケートでは、それぞれ 81.44%、82.48%と全体の平均を上回っており、シラバスによって明確に授業の説明がなされ、それに基づいて適正に授業が進められていることがわかる。また成績評価については、2023 年度の学習行動比較調査において「あなたが受けた授業の成績評価は適正だと感じていますか」という項目で 43%と比較的高いものであり、さらに「科目についてのばらつきがある」と回答したものは 21.8%で、他学科と比較してもっとも少ないことから、英語コミュニケーション学科全体としてシラバスに基づいて適切に成績評価がなされていると言える。ただし「各科目の成績分布」を詳細に検討すると、一部の同一科目内である程度のばらつきが認められるため、今後は成績評価の際に担当者間での調整が必要と思われる。

協定留学をしたものや編入生の単位認定、あるいは英語力を示す試験のスコアなどについては、国際交流課や教務部といった関係部署と連携し、学科でも確認した後、教授会で承認を得るという手続きをとって、慎重かつ厳格に単位認定を行っている。ただしこの点についても、科目名だけでは判断しがたい場合があるため、今後も引き続きより慎重な単位認定が求められる。

自己評価：S (A) B・C

評価項目⑤

学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。

<評価の視点>

- ・学習成果を把握・評価する目的や指標、方法等について考えを明確にしているか。
- ・学習成果を把握・評価する指標や方法は、学位授与方針に定めた学習成果に照らして適切なものか。

参照資料

- ・各種アンケート（ALCS 学修行動比較調査、授業アンケート、卒業時アンケート等）
- ・ジェネリックスキル測定テストの結果
- ・その他参照した資料（ 学科主催の TOEIC )

【現状分析】

先述のとおり、授業のシラバスが「授業進行の理解」において参考になったか、また「履修登録」の際に参考になったかという設問では、2023 年度後期で見ると全体の平均を上回っており、シラバスによって明確に授業の説明がなされ、それに基づいて適正に授業が進められていることがわかる。また成績評価については、学習行動比較調査において「あなたが受けた授業の成績評価は適正だと感じていますか」という項目において比較的高いものであり、さらに「科目についてのばらつきがある」と回答したのも他学科と比べて少ないことから、英語コミュニケーション学科全体としてシラバスに基づいて適切に成績評価がなされていると考えられる。

学生の卒業時アンケートでは、「幅広い知識・教養が身に付けられる授業の多さ」と「自分で考

える力が身につく授業の多さ」、「討論・参加形式の授業が受けられること」において高い満足度が見られる。これは英語文化コミュニケーション学科学位授与の方針における「知識・理解」の項目で、「人文、社会、自然など、広い教養を有している」と示され、また「思考・判断」の項目において「主体的で批判的・合理的な思考を展開できる」と記されていることに対応する結果である。それはつまり英語文化コミュニケーション学科の体系的な科目編成により、英文学、英語学、英語教育、異文化理解の4分野についてバランスよく教授されており、さらには自立的な思考力の養成につながっていると考えられる。また「国際感覚が身につく授業の多さ」、「語学力が向上する授業・制度」の項目でも高い満足度を得ている。これはまた英語文化コミュニケーション学科学位授与の方針の「汎用的技能」の項目で、「高度の実用的英語運用ができる」と記されていることや、「対話・相互理解」の項目で「対話・議論を通して、他者（異文化も含め）との相互理解・協調に努めることができる」と示されている点に対応するものであり、グローバルな視点に立った授業が展開され、英語力の向上とコミュニケーション能力を高めるための、効果的な教育が行われていることを示していると考えられる。

また現在、英語文化コミュニケーション学科の全学生が、大学の教育活動予算によって無料でTOEICを1年に一度受験できる体制を整えている。それによれば2024年3月に卒業した学生の平均点は、経年変化で2021年7月547点、2022年7月566点、2023年4月583点と着実に伸長している。（2020年度はコロナのために試験中止。）さらに2023年7月に実施したTOEICでは、650点以上を取得した受験者の割合が、2年生では13,4%、3年生では35,7%と確実に増加している。このことから英語文化コミュニケーション学科では、英語力向上のためのカリキュラムが十分に機能していることがわかる。

さらにジェネリックスキル測定テストによると、「授業内での学生間のディスカッション」や「課題発表の機会」の項目において高い数値が示されている。これによりコミュニケーション力を育成するという学科の目標がある程度達成されていると言えるだろう。また「学内に設けられている自由に学べる場の活用」や「思いどおりに学業ができている実感」という項目においても、比較的高い値が示されていることから、学生が主体的、自立的に学業に取り組んでいることがわかる。

自己評価：S (A) B・C

**評価項目⑥**

教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

**<評価の視点>**

- ・教育課程及びその内容、教育方法に関する自己点検・評価の基準、体制、方法、プロセス、周期等を明確にしているか。
- ・課程修了時に求められる学習成果の測定・評価結果や授業内外における学生の学習状況、資格試験の取得状況、進路状況等の情報を活用するなど、適切な情報に基づいているか。
- ・外部の視点や学生の意見を取り入れるなど、自己点検・評価の客観性を高めるための工夫を行っているか。
- ・自己点検・評価の結果を活用し、教育課程及びその内容、教育方法の改善・向上に取り組んでいるか。

**参照資料**

- ・過年度自己点検評価シート
- ・卒業時アンケート（大学）
- ・資格取得状況
- ・進路就職状況
- ・最低修業年限内卒業率
- ・過年度のFDの取組企画と振り返りシート
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（ )

#### 【現状分析】

英語文化コミュニケーション学科では、学科会議で課題や重点事項を共有した後、特に以下のような活動を実施している。

- ① 授業担当者会議を開催し、シラバス（特に授業概要、評価方法、使用テキスト）について議論する。
- ② 授業評価アンケート、学生生活実態調査、学生満足度調査などを検証・分析する。
- ③ 英文学科留学プログラム参加学生の報告会を開催する。
- ④ TOEFL/TOEIC テストを実施し、学生の得点結果を分析する。
- ⑤ 学科の全教員による意見交換・評価に基づいて優秀卒業論文を選定し、それらを *Essays & Studies* という冊子にまとめて発行する。
- ⑥ 教員活動報告について教員間で共有し、学科会議において確認する。

①については、シラバスを学生に十分理解してもらうために、全教員がシラバスの書き方、担当者の適性、授業概要、評価方法、使用テキストなどについて議論している。②については、授業の質を向上させるために、授業内容、難易度、課題の量、評価に対する学生の反応、英語文化コミュニケーション学科の学生の特徴などを議論している。③については、留学への関心を高め、留学者数を増やすために、実際に留学をした帰国学生による発表会を開催し、教員が学生の留学体験や語学学習の経緯を把握し、他の学生がそれらを知る機会となっている。④については、学生のスコアアップのために得点分布をデータ化し、傾向と学習方法を分析している。⑤については、4回生と在校生の学問に対する研究意欲および各教員の論文指導力向上のために、全教員による審査・協議を通して全4回生の卒業論文の中から優れたものを10本程度選定し、それらを上記の論文集 *Essays & Studies* に掲載して、卒業論文の書き方の手引きとして在校生に配布している。⑥については、いったんオンライン上で共有したあと、学科会議において各教員の教育活動、特に次年度に向けた目標や課題、抱負、および自己評価などを全員で確認し、議論している。

#### 【成果が上がっている点】

上記の活動の①と②については、3回生の満足度アンケートにおける「学んだ成果に対する成績評価のされ方」と「カリキュラムの表現やシラバス記述のわかりやすさ」の両項目で、全学科の平均（84.4%と76.4%）を上回る高い満足度（90%、80%）を得ている。④については、特に留学に関係するTOEFLの得点に着目して2022年度と2023年度を比較すれば、留学基準点である470点

に到達している学生が第1回目のテスト（1回生前期）では22人から26人に増えている。特にreadingセクションの得点率アップが見られた。⑤については、論集を3回生や4回生のゼミで配布することで、それが学生にとって卒論を書く際の手引きとして役立っているだけでなく、英語文化コミュニケーション学科の学生全員にとっても大きな刺激になり、研究への関心・興味を高める効果をもたらしていると思われる。

#### 【課題となっている点】

2020年度、2021年度とコロナウイルスの影響で、全学協定留学とともに学科の留学プログラムも実施されていなかったが、一昨年度から再開された。しかしながら昨今の円安により、海外留学にかなりの費用がかかるため、たとえ基準のスコアをクリアしても経済的な事情で断念せざるを得ない学生もいると思われる。それゆえ毎年秋に実施している1回生対象の留学プログラム参加学生による報告会などを開催し、TOEFLやTOEICの授業を配置して学生の英語力向上に努めても、留学希望者数の増加にはなかなかつながらないという状況がある。また今後は大学受験者数の減少により、入学者の英語力も徐々に低下していく傾向にあると思われるため、より丁寧で効果的な英語スキル系授業の展開が求められる。

## 2. 分析を踏まえた長所と問題点

#### 【長所】

学科の協定留学については、TOEFLだけではなく、より学生が取り組みやすく高得点が取りやすいと考えられるTOEICでも応募できるように、2024年度から応募資格を変更した。その成果については今後注視していきたい。

また2023年度には学科のFD活動として、2回生後期に大学院の留学説明会と卒業後の進路について説明を行い、さらに学修や卒業後のキャリア形成についてのアンケートを実施した。その結果はカリキュラム改訂の際に参考資料として役立っている。

#### 【問題点】

2023年度の卒業時アンケートにおける「専門的な知識が身につく授業の多さ」に対する満足度は80.5%と全学科のなかでも比較的低いものであり、今後はより高度で専門的な科目の提供が必要と思われる。また「将来の職業に役立つ知識・技術を身につけられる授業の多さ」という項目でも全学科平均をわずかに下回るものであり、より実践的な科目の配置が求められるところである。

## 3. 改善・発展方策

#### 【改善・発展方策】

2025年度からのカリキュラム改訂に向けて、より高度で専門的、あるいは実践的な科目の配置を計画している。まず学科のFDにおけるアンケート調査から得られた結果をもとに、学生の興味



これにより英語文化コミュニケーション学科における、学生の受け入れ方針がわかりやすく明示されていると考えられる。

自己評価：S (A) B・C

<p><b>評価項目③</b> 学生の受け入れに関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。 ＜評価の視点＞</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・学生の受け入れに関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。</li><li>・点検・評価の結果を活用して、学生の受け入れに関わる事項の改善・向上に取り組み、効果的な取り組みへとつなげているか。</li></ul>
<p><b>参照資料</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・実志願者・延べ志願者推移</li><li>・入試区分別志願者推移</li><li>・入試区分別累積 GPA</li><li>・各種会議の議事録等</li><li>・その他参照した資料（ )</li></ul>

#### 【現状分析】

本学科への実志願者数は 2023 年度 330 名、2024 年度 285 名と大幅に減少しており、公募・一般前期志願者数も確実に減ってきている。それに伴い本学科の偏差値は2022年52.5、2023年47.5、2024年45と下がってきており、徐々にブランド力を失い、選ばれる学科ではなくなりつつある。また 2023 年度入学者の本学科を選んだ理由においては、「学びたい学問がある」という項目が 23%と他学科と比べても低く、受験生にとって魅力的な科目編成とはなっていないことが考えられる。

そのため 2022 年度から総合型選抜入試において、外部試験のスコアを評価の対象とする方式を導入し、多様な選抜方法によってより多くの志願者を獲得できるように努めている。また受験生にとってさらに魅力的な科目編成となるよう、2025 年度から実施されるカリキュラム改訂を鋭意進めている。

## 2. 分析を踏まえた長所と問題点

### 【長所】

より多くの志願者を獲得するために 2022 年度から新たな方式を導入した総合型選抜入試では、A 方式で外部試験のスコアを評価の対象として採用し、B 方式では面接を重視している。まだこれらの選抜方式が直接的な志願者増にはつながっていないが、オープンキャンパスではこの方式について高校生や保護者から多くの質問があり、一定の関心ももたれていることが窺われる。

総合型選抜と A0 入試による入学者の累積 GPA を見ると、2021 年度 3.093、2022 年度 3.044、2023 年度 3.524 と他の入試区分による入学者と比べて高く、これらの方式により意欲的で優秀な学生を獲得できていると考えられる。(各入試結果の入試区分別累積 GPA)

また 2025 年度からのカリキュラム改訂においては、全日空の関連会社である ANA 総研と連携しエアライン関連の授業を充実させることや、近隣の国際的なホテル、ハイアット・リージェンシー京都でのインターンシップを実施することが決定しているが、これについても最近のオープン

キャンパスで多くの質問があり、一定の注目を集めていることが期待される。

#### 【問題点】

上記の総合型選抜入試の方法については、まだ受験生に十分浸透していないと思われるため、直接的な志願者の増加にはつながっておらず、さらなる検討が必要と思われる。またカリキュラム改訂についても、今後それがどのように受験生の動向に影響するか未知数の部分があり、注視していく必要がある。場合によってはさらなるカリキュラム変更の可能性も考えられる。

### 3. 改善・発展方策

#### 【改善・発展方策】

総合型選抜の A 方式においては各種外部試験のスコアを評価の対象としているが、この点についてオープンキャンパスで多くの質問があった。それはこの方式がそれだけ受験生の関心を集めていることの証左であるとも言えるが、逆にまた一部分かりにくいところがあるためとも考えられる。また B 方式においては面接を重視しているが、そこでも面接を担当する教員間で評価に差があってはならない。入試区分別累積 GPA で示されているとおり、この方式により比較的優秀な学生が確保されていると考えられることから、今後はその評価基準設定に問題はないか、提示の仕方は適切であるか、評価基準は明確かということについて学科会議で検討を重ね、重要な選抜方式として位置付けていく。

## 教員・教員組織

### 1. 現状分析

自己評価：S (A) B・C

#### 評価項目①

教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげていること。

#### <評価の視点>

- ・大学として求める教員像や教員組織の編制方針に基づき、教員組織を編制しているか。

#### ※具体的な例

- ・科目適合性を含め、学習成果の達成につながる教育や研究等の実施に適った教員構成。
- ・各教員の担当授業科目、担当授業時間の適切な把握・管理。
- ・授業において指導補助者に補助又は授業の一部を担当させる場合、あらかじめ責任関係や役割を規程等に定め、明確な指導計画のもとで適任者にそれを行わせているか。

#### 参照資料

- ・教員組織の編成方針
- ・科目群別非常勤教員比率
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料 ( )

【現状分析】

2023年度の本学科の教員組織編成は12人中、職位に関しては教授が8人(66%)、准教授が4人(33%)となっている。平均年齢は54歳、性別に関しては男性が8人(66%)、女性が4人(33%)である。以上のことから教授の比率については、大学教員枠基準の60%をやや上回っているものの、男女比については、どちらかの性別比率が大学教員枠基準の70%を超えていないので、全体としてほぼバランスの取れた編成となっていると言える。

本学科の非常勤教員比率を確認すると、2021年度から2023年度までで、30%、30%、33%と推移しており、文学部の他学科と比べても一番低いものであり、大学全体の中でも比較的低い割合となっている。このことから英語文化コミュニケーション学科は、ほぼ適正な非常勤教員比率となっていると考えられる。

ただし本学科は言うまでもなく外国語に関係した研究分野であり、英語の実践的な能力を高めるためには、英語母語話者による指導が不可欠である、また英語の特殊な技能・能力が要求される分野・業種に関しては、それらに精通した専門家による実践的指導が求められるので、学生のニーズや満足度を満たすためには、現状の非常勤講師数は必要である。

【成果が上がっている点】

2023年度に採用した教員は英語のネイティブであり、これにより学科の外国人教員は3人となった。そのことで学生の英語力を向上させるという英語文化コミュニケーション学科の重要な教育方針が、より強化されたと考えられる。

自己評価：S (A) B・C

<p>評価項目② 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っていること。 &lt;評価の視点&gt; ・教員の募集、採用、昇任等に関わる明確な基準及び手続に沿い、公正性に配慮しながら人事を行っているか。 ・年齢構成に著しい偏りが生じないように人事を行っているか。また、性別など教員の多様性に配慮しているか。</p>
<p>参照資料 ・教員の性別・年齢・職位構成 ・各種会議の議事録等 ・その他参照した資料 ( )</p>

【現状分析】

昨年度は准教授から教授への昇任人事が1件あったが、その際には本学科の教員2名、他学科の教員1名からなる昇任人事委員会を組織し、当該教員の業績等を精査して厳正なる審査を行い、その後教授会での承認を経て昇任が認められた。

また一昨年度は准教授の新規採用人事が1件認められたが、その際には専門や母語とする言語、年齢などが公募によって明確に示された。本学科の教員3名、他学科の教員1名からなる新規採用人事委員会が結成され、書類審査と面接によって公正かつ厳格に審査が行われた。

その結果、前述のとおり英語文化コミュニケーション学科の専任教員 12 人中、職位に関しては教授 8 人 (66%)、准教授が 4 人 (33%)、平均年齢は 54 歳、性別に関しては男性が 8 人 (66%)、女性が 4 人 (33%) となっている。また英語のネイティブ教員は 3 名で全体の 25% である。全体としてやや男性が多く、平均年齢も 54 歳と決して低くはないが、極端な偏りも見られずある程度バランスの取れた教員構成となっていると考えられる。

ただし 2023 年度末をもって教授が 1 人定年退職し特任教員となったため、2024 年度から専任教員は 11 名となっている。これにより学科内の業務や授業の担当においてやや支障が生じており、今後新規採用の機会があれば、よりバランスの取れた教員構成とするべく若手女性教員の採用が望まれるところである。

自己評価：S (A) B・C

評価項目③

教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。

<評価の視点>

- ・教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につなげる組織的な取り組みを行い、成果を得ているか。
- ・教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ているか。
- ・大学としての考えに応じて教員の業績を評価する仕組みを導入し、教育活動、研究活動等の活性化を図ることに寄与しているか。
- ・教員以外が指導補助者となって教育に関わる場合、必要な研修を行い、授業の運営等が適切になされるよう図っているか。

参照資料

- ・過年度の FD の取組企画と結果
- ・授業アンケート (大学)
- ・卒業生アンケート (大学)
- ・ALCS 学修行動比較調査 (1・3 回生)
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料 ( )

【現状分析】

現在英語文化コミュニケーション学科では、学科内の組織である英文学会による『英文学論叢』と、大学院文学研究科紀要『英語英文学論輯』の 2 冊を発行している。このうち『英文学論叢』については母体となる英文学会が解体されるため、2024 年度をもって廃刊となるが、大学院の『英語英文学論輯』については引き続き教員の研究成果公表の媒体として発行する。投稿論文については学科の教員が査読し、十分にチェックをしたうえで掲載されている。

また毎年秋に開催されている公開講座では、学科の教員 2 名が他の教員や本学科の学生のみならず、広く一般の方々にもそれぞれ最新の研究成果を披露している。昨年度はコロナ禍後をはじめて対面で公開講座を実施し、在学生だけでなく一般の方々も多数参加した。

さらに FD についても学科で議論したのち、毎年確実に取り組んでいる。近年では 2022 年度に京都女子高校の英語教員との懇談会、2023 年度に学生への大学院説明会及び、進路についての意

識調査などを行った。それらの成果は学科教員全体で共有され、各自の授業での取り組みやカリキュラム改訂に活用されている。

自己評価：S (A) B・C

<p><b>評価項目④</b> 教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。 &lt;評価の視点&gt; ・教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。 ・点検・評価の結果を活用して、教員組織に関わる事項の改善・向上に取り組む、効果的な取り組みへとつなげているか。</p>
<p><b>参照資料</b> ・各種会議の議事録等 ・過年度自己点検評価シート ・その他参照した資料（ )</p>

#### 【現状分析】

前述のとおり 2023 年度時点において 12 人の学科教員のうち、職位に関しては教授が 8 人(66%)、准教授が 4 人 (33%) という構成になっており、平均年齢は 54 歳、性別は男性が 8 人 (66%)、女性が 4 人 (33%) となっている。また英語のネイティブ教員は 3 名で全体の 25%である。

教員の特性としては教育歴や研究歴が長く、研究者として優れた業績を備えた者が多く、英文学、英語学、英語教育、異文化理解の各分野の最先端の情報と知識を学生に提供できている。

## 2. 分析を踏まえた長所と問題点

#### 【長所】

卒業時満足度アンケートでは、「国際感覚が身につく授業が多い」、「語学力が向上する授業・制度が充実している」などの項目で比較的高い満足度を得ている。これは全体の 25%を占める 3 人のネイティブ教員が所属し、専門的にもバランスの取れた、現在の教員組織編成によるものと考えられる。また様々な研究分野をもつ教員が担当することで、カリキュラム・ポリシーを踏まえた幅広い学びを提供することができている。

#### 【問題点】

上述したように 2023 年度の教員編成において、職位については教授の比率が 66%となっており、大学教員枠基準の 60%を超えている。また性別に関しても、男性比率が 66%となっており、大学教員枠基準の 70%に近づいている。さらに ST 比は大学の平均を大きく上回る 41.7 という数値であり、平均年齢も 54 歳と決して低くはない。

### 3. 改善・発展方策

#### 【改善・発展方策】

2023年度から着任した教員は英語のネイティブであり、准教授として採用された。このことにより教授比率は一時改善されたが、その後別の教員の准教授から教授への昇任があり、その点において状況は変わっていない。今後新規の採用人事が認められる際には、教授ではなく准教授か講師を公募することが必要になってくる。またその際に同等の業績や能力を有すると判断される場合は、女性を積極的に採用することも考慮に入れなければならない。